

一次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ぼくはミュンシュの弟子になりたい一心でアメリカに来たくらいだから、(①)ミュンシュという指揮者が好きかということはおわかってもらえるだろう。ぼくが最初に彼の指揮する演奏を聞いたのは、パリのシャンゼリゼ劇場だ。その時はモーツァルトの「嬉遊曲」とブラームスの交響曲を指揮した。モーツァルトはぼくがはっとするほどすばらしかった。そのナイーブで若々しい音の美しさがひたひたとぼくの心にとけ込んで、(②)今までのぼく自身がどこかに消えてなくなるようだった。その瞬間、劇場の中には、ぼくもモーツァルトもミュンシュも何もなく、ただ美しさだけが充滿していた。ぼくはその後時々その時の感動を思い出しては楽しんだものだ。

その次にミュンシュが指揮する演奏を聞いたのは、ぼくが第一回のコンクールを受けるためにブザンソンにかけた時のことで、彼はその劇場で、ベルリオズの「ローマの謝肉祭」の指揮をしていた。この時は完全に圧倒された。(1)あの老体のどこからこんなにもみずみずしい音を引き出せるのかと思った。とくに彼のベルリオズにはたくまざる磨きかけられ、純粹にびかびかと光っていた。一つの曲が指揮者次第でこれほど変わるといふことにぼくは驚かされ、体がふるえるような感激にひたつたものだ。

指揮の仕方は(③)自然で柔軟である。レコードのいい曲を聞いた時に思わず足で拍子をとったりするように、音楽の流れにのって自然に手が動いて行くといったふうな指揮ぶりである。そこには振っている棒もなければ腕も肉体もない。(④)音楽があるだけだ。これをダイゴミというのかも知れない。

ともかくブザンソンの音楽祭でミュンシュにうたれ、ベルリオズの「謝肉祭」に感激したぼくは、じっとしていることができなかった。この感激を一人で秘めていることができなかった。それでそのコンクール後行なわれたパーティの時にぼくはミュンシュの姿を見かけると、思いきってその前に行った。

「ミュンシュ先生」

ぼくの声はふるえていたに違いない。ミュンシュはぼくのほうを振り向いた。しかしさっき指揮していた時の崇高な顔とは違って、ひどく気むずかしそうな目をしていて。ぼくは一瞬、たった今まで言おうとしていた言葉がノドに引っかかった。ミュンシュはますます気むずかしそうな顔をして、

「なんだい？」

と、ぼくのほうを睨んだ。

「先生の弟子にしてください」

ぼくははっきりとそう言った。断られたら断られた時のことだ。ぼくは今日までこのデンで生きて来たのだが、幸いそれがいつもいい結果を生んでいる。するとミュンシュは今度は面倒くさそうな顔をして、

「俺はどんな奴でも弟子になんかおとらない。だいたい、そんな時間がない。指揮というものは人に教えられるものではない」と、ジェスチュアをまじえて話された。ぼくはがっくりきた。

「駄目ですか」

「しかし、もしお前がアメリカのポストンへ夏来たら、教えてやってもいい」

それだけ言うと、ミュンシュはもうぼくのことなど完全に無視して、周囲の人たちと談笑し始めた。しかしそれでも、ぼくには特別にいやな感じが残らなかった。これが普通の相手なら、何を生意気など、かっとなが逆流するところかもしれない。なぜそうならなかったかというところ、その時のミュンシュの顔には、今まで自分が楽しんで来たことを無理やりに中断させられて機嫌の悪い子供のような稚氣と純真さが溢れていたのだ。この時ぼくは思った。棒を振らせればミュンシュは名指揮者だが、それ以外のことはまったく子供のようだと。ぼくはその後ミュンシュとつきあうようになって、その時の直感が少しも狂っていなかったことを知った。

ぼくの念願がかなって、アメリカのポストンで六週間ミュンシュの教えを受け、その後またヨーロッパに来たのだが、その時、パリの飛行場でミュンシュに会った。そして一緒に飛行場で食事をした。何を話したか忘れたが、ともかくミュンシュは一人で夢中でしゃべっていた。その時、離陸する飛行機が猛烈にエンジンをふかし始めると、急に話を止めて飛行機のほうを見た。そして飛行機が飛び立って、完全に雲か何かに見まぢがうほど遠くに小さくなるまで、じっと見つめていた。その間、周囲の婦人連や秘書が何かを話しかけても、全然反応を示さないのだ。そして飛行機が見えなくなると、今まで話を中断していたことなど忘れてたように、また前の話の続きを始めた。ぼくは驚いたが、周囲の婦人連や秘書は当たり前な顔をしていた。それだけぼくより彼らのほうがミュンシュの性質をのみ込んでいるのだ。ぼくはその時以来、ミュンシュとつきあう場合は、彼の興味を惹く物が消えるまでは、じっと待っていなければならないことを知った。こういうことは大人の世界にはない。子供の世界にだけあることなのだ。そうした子供の心が、彼の音楽をいつまでも純粹で若々しく、美しく輝かしているのに違いない。

(小澤征爾『ボクの音楽武者修行』より)

(語注)

\*1 ナイーブ……素朴なさま。純粹なさま。うぶ。

\*2 ブザンソン……フランス東部の都市で、国際指揮者コンクールの開催地。

\*3 崇高……気高く偉大なこと。

問一 空欄(①)～(④)に入るもっともふさわしい語を、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア まるで      イ いかにも      ウ たいして      エ どれほど      オ ただ

問二

線部 a、c の語句の意味としてもっともふさわしいものを、次のア、イ、ウ、エ、オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a たくまざる

ア たくましい イ よく考えられた ウ 丁寧な エ すぐれた オ 自然な

b ダイゴミ

ア 大きなよろこび イ 磨き抜かれた美しさ ウ 何でもない味わい エ ほんとうの面白さ オ この世で最高の教え

c デン

ア 仮定 イ 方法 ウ 理由 エ 欠点 オ 展開

問三 線部(1)「あの老体のどこからこんなにみずみずしい音を引き出せるのか」とありますが、なぜミュンシュはそんな指揮ができると筆者は考えていますか。わかりやすく説明しなさい。

問四 線部(2)「ひどく気むずかしそうな目をしていた」とありますが、ミュンシュが「気むずかしそうな目」をしたのはなぜですか。「……だから。」につながるように本文中より三十字以内で抜き出しなさい。(句読点を含む)

問五 線部(3)「その後ミュンシュとつきあうようになって」とありますが、筆者はその後ミュンシュと、どのようなことに注意してつきあうようになりましたか。本文中より三十五字以内で抜き出しなさい。(句読点を含む)

## 二次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「何じゃってか。こいつが『わし』って言うたんじゃってか。」

そういう、声がわり前の、しかし太い声がきこえる。それは人輪のなかの方でいっている。さっき「何じゃってか……」と行って駆け出して行った少年のとはちがっているらしくもある。

「こいつ、というのが中にいるんだらう。そこから問題がおこったのだらう……」

良平は、大きい子供をくぐるようにして少しだけ前へ出た。前へ出きって、人垣の中まで出てしまうのは少しこわい。しかしそれで見えた。大体のみこめた気がする。

輪のまんなかに、色の白い、紺の着物を着た男の子が立っている。見たことのない生徒だから、よそから転校してきた生徒なのだらう。

その生徒は、あおくなつてきよろきよろしているらしい。右左と目を動かしている。口がすこし尖っている。それは、何か抗議しようとして尖っているのらしくもあるが、生まれつきそういう口つきなのらしくもある。細い高い鼻と、ほそいおとがいの間で口が反歯気味につき出ている。口をほんのちよつと開けている。三年生か四年生くらいだらう。

「こういう子供は、喧嘩には強くないぞ……」

それは、経験で知っていたのではない。良平はただそう思う。

「お前、わが身のことを『わし』っていうたんか。」

さっきの生徒が詰るように訊く。

「うん……」と少年が答える。

「あむ……」と聞いたが、詰問した方は、そこで詰まったらしい。

多分その生徒は、どこかよそのものなんだらう。その生徒の方では、良平らが「うら」とか「うちら」とかいうところを、「わし」というんだらう。良平らのところでは、「わし」とは子供は決していわぬ。子供はむろんだが、大人の百姓も決して「わし」とはいわぬ。「わし」というのは、このへんでは決まっています。警察のだんなが「わし」という。しかしこれは、良平らはそう思っているが、町の警察の人は耳で聞いたことにはない。舟寄の駐在所の巡査は聞いたことがある。それは都巡査という人で、やさしい老人だった。むかしの御家中の人だとおじさんから聞いている。からだは大きくないが、立派な顔をして、ごま塩ひげを立てている。ひげも、白いまま太くて立派だ。子供たちには、巡査はすべておそろしいものとなっているが、この都巡査はおそろしくない。子供などには、れんげ畑を荒らしているのを見つかつても、おそろしい剣幕では叱らない。子供が好きなのかも知れない。大人にも、大人の話を引きかじったところではやはりやさしいらしい。それでも、向うから都巡査がくるのに出あうと、何となく、何かわるいことをしなかつたかなという気になる。この都巡査が「わし」という。

Ⅰ

それから林家のだんなが「わし」という。これは、良平も一ぺんか二へん聞いたことがある。ひょうきん者の瀬戸口のおんさんが、人のいるところで林のだんなの口真似をしてみせて笑わせる。そのときも「わし」という。

それから町のお医者さんが「わし」という。医者は三軒やあるが、どの医者もみな「わし」というか、それは良平は知っていない。去年の体格検査に、良平はトラホームがあることがわかった。トラホーム——しかし良平のはごく軽いので、二三度も医者へ行けばいいということだったが、医者へ一人で行くのはいやだったけれども良平は行った。二三度ではなくて良平は五へん行った。それは松本さんという医者で、町の東北の端にある。この松本さんは、細目の八の字ひげを生やしていた。細いが長い。この人も鼻が高い。そしてからだが痩せていて、顔色はいい。金縁眼鏡をかけて、人力に乗って走っているときでも眉間に八の字を寄せている。何となく癩癩もちに見える。松本医者は郡会議員か何かもしているという話だ。何議員というのか、良平はたしかには知らなかったが、道楽者だという話もある。医者が道楽者というのは良平にはわからない。この松本さんが、良平が薬をさしてもらいに行ったときに良平にも「わし」といった。

このほかに、もう一人、日露戦争に行ってきた将校の儀間のお寺さんが「わし」という。「わし」というのはこれくらいだ。ほかにはだれも、「わたくし」ということはあっても、「わし」とはいわぬ。②

それを、今この子供が自分で「わし」といったんだろう。それを聞きつけて、大きい子が生意気だと思ったんだろう。それは勘ちがいなんではないのか……③  
「お前、わが身のことを『わし』っていうたんか。」といわれて、「そんなこといわん……」とでもいえば相手には張合いがあったんだろう。「うん……」といっ

てしまったので、それ以上手が出なくなったというのが目の前の様子なんだろう。

良平の想像はあたっていたらしい。あおくなった少年は、おどおどして、何で大きい生徒が腹を立てたのかまだわかっていないらしい。④

「お前、金沢から来たんじゃないか。」とまたさっきの生徒が訊く。⑤

⑤

「うん」と同じ調子で少年が答える。

「金沢か。騎兵九聯隊のあるとこじゃな。杉浦先生が騎兵に行つてなるとこじゃな。そんなら、金沢でア、子供でも『わし』っていうんじゃないな。」

そう良平は思ったが、金沢のほんとうのことは良平は知らなかった。大きい生徒に、金沢では子供でも「わし」というんだろう、別にこの少年は、生意気で「わし」というたんじゃないだろう、だから、そう怒らんでもいいんだ、ということをしてやりたいが、ほんとのことを知らぬのでいい出せない。「何じゃあ。お前、金沢のこと知ってるんかえ……」そう問われたらそれで終いだ。自分でもどかしいが、目の前の子供がかわいそうになる。この子供は、まだ原因に気がつかぬらしい。その子供が自分より大きいのがなおかわいそうになる……

「あしたから、『わし』っていうたら承知せんぞ。」

そういって、大きい生徒がずいと傍へよる。良平ははっとした。

「あ、鳴った……」と誰かいうのと、「かん、かん、かん——かん、かん、かん……」と鐘が鳴り出すのが一しよに良平にきこえた。子供みんなが、言葉にならぬ何か声を出して、大きい生徒もそのまま整理場へ走りだした。

(中野重治『梨花の花』より)

(語注) \*1 緋………所々すつたように模様を出した染め物。

\*2 だんな………「旦那」の方言。

\*3 舟寄………現福井県坂井市丸岡町内の地名。

\*4 御家中………江戸時代、一番の家臣を総称して呼んだ語。家臣団。また特定の大名の家臣をさして「殿の御家中」などと呼んだ。

\*5 おんさん………「おじさん」の方言。

\*6 トラホーム………伝染性の慢性結膜炎。トラコーマ。

\*7 人力………人力車の略。後の座席に人を乗せ、車夫が引いて走る二輪車。

\*8 癩癩もち………感情を抑えきれず、すぐ怒る性格のこと。

\*9 将校………軍隊で戦闘の指揮をする士官。

\*10 儀間………現福井県坂井市丸岡町内の地名。

\*11 騎兵九聯隊………富山・石川・福井各県の兵士で構成された騎兵を主とする連隊。金沢に本拠地が置かれた。

問一——線部(1)「こいつ」とありますが、「こいつ」の行動や心情であるものを——線部ア、オより一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「何じゃってか……」といって駆け出して行った

イ 人垣の中まで出てしまうのは少しこわい

ウ 口をほんのちよっと開けている

エ 詰るように訊く

オ 「ふむ……」といった

問二——線部(2)「それ」とありますが、これは良平のどんな行動を指していますか。「……」という行動。「……」につながるように、本文中より抜き出しなさい。

問三——線部(3)「大体のみこめた気がする」とありますが、どのようなことが「のみこめた」のですか。わかりやすく説明しなさい。

問四——線部(4)「それは、経験で知っていたのではない」とありますが、これは「良平」がどのようなことを述べていますか。もっともふさわしいものをア～エより選び、記号で答えなさい。

- ア 良平は喧嘩がまだできないほど幼いということ。
- イ 良平を相手に喧嘩する人は誰もいないということ。
- ウ 良平は性格的に喧嘩をしたことがないということ。
- エ 良平は喧嘩より勉強をするのが得意だということ。

問五——線部(5)「詰問した方は、そこで詰まったらしい」とありますが、なぜ「詰まった」のですか。理由としてもっともふさわしいものを次のア～エより選び、記号で答えなさい。

- ア 相手をこらしめてやろうと思ったが、相手は自分が悪いとは思っていないので、気負い込んだ気持ちが無意味に感じられたから。
- イ 相手の間違いを正そうと考えたが、相手が人の意見を聞くような素直な態度ではなかったため、何も言えなくなってしまったから。
- ウ 相手と言い合いをしてやろうと思ったが、相手の方が正しいので、自分の意見を引込めなければならなかったから。
- エ 相手にその怒りの気持ちをぶつけてやろうと思ったが、冷静に考えると、それは正しいことではないと思ったから。

問六——線部(6)「多分その生徒は、どこかよそのものなんだろう」とありますが、ここから出来事が中断して良平の思いが書かれています。出来事が再び書かれ始める直前、つまり良平の思いが書かれているのはどこまでですか。段落末の①～⑤より一つを選び、記号で答えなさい。

問七——線部(7)「わし」というのは、このへんでは決まっています」とありますが、「このへん」で普段「わし」というのは、どのような人達ですか。次の文を完成させるため、( ) にふさわしい言葉を本文中より二字で抜き出しなさい。

( ) なる人。

問八——線部(8)「勘ちがい」とありますが、これはどのようなことですか。次の文を完成させるため、( ) にふさわしい言葉を入れなさい。

金沢では子供が( )

( ) ないのに、格好をつけて、そうしていると思ったこと。

問九——線部(9)「それで終いだ」とありますが、どういうことですか。二十五字以内でわかりやすく説明しなさい。

問十——線部(10)「良平ははっとした」とありますが、なぜ「はっとした」のですか。わかりやすく説明しなさい。

### 三 次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

(1) 相席おねがいします

昼食時の食堂では、ごくなんでもないことのようにこういわれる。わたしがよくいくうどん屋などもそうで、それをかえると麺類の好きな私も昼食にでるのがついおっくうになる。

いったい、見も知らぬあいてとむかいあってつくねんとすわっているだけでも気づまりなのに、そんな状態でものを食べるのは、おちつかないことはなほだし。いきおい、いそいでかきこんで席を立つということになる。

グルメブームといわれるなかで、日本人の食事のこうした底辺の光景をみると、その貧しさ<sup>(2)</sup>に寒々しいおもいがする。

この相席という( 1 ) が、いつからはじまったのか、かねがね知りたいたいとおもっているのだが、その手がかりがない。しかし、とうぜん、テーブルが一般に広まる以前にはかんがえられないから、そう古いことではないのだろう。

いずれにしても、食事の相席は、電車などで知らない人とならんですわるのとはわけがちがうのである。

今日では、一家そろって食事をする日がますます少なくなつた。それにつれて、まったくの他人と同席して、それぞれかたてに食べることをなんともおもわなくなつてきている。

けれども、ほかの生理作用についてと同様に、食べることはどこの社会でもさまざまな禁忌<sup>\*</sup>(タブー)があり、つつしみがもとめられる。そのために、たいいていの社会に、多かれ少なかれこみいった食事作法がきめられている。男女べつべつに食事をしたり、食べるところをみられるのを裸<sup>はだか</sup>をみられる以上にはずかしがる社会もある。

つまり、食べることは、本来が自分の「ナワバリ」でおこなう、もっともプライベートな行為なのである。

ここで「ナワバリ」というのは、人間個人や集団がもつ、物理的・( 2 ) 的な非許容空間<sup>\*</sup>、つまり、他人に立ちいられたくない自分だけの空間、いわば皮膚の外に広がるもうひとつのからだのようなものである。相席をさせられると、この空間をたがいに侵すことになる。それが食べ物のあじわいをどれほどよくしているかわからない。

これがカウンターの席になると、となりにだれがすわってもあまり抵抗を感じないのは、人間の個人の「ナワバリ」が、前方に長く( 3 ) や左右には短い、楕円形<sup>だんえんけい</sup>をしているからだろう。

この「ナワバリ」は、だれにでもあるが、どの社会でも同じ大きさというわけではない。欧米人などにくらべれば、日本人はふだん身体接触を好まないにもかかわらず、はるかに小さな「ナワバリ」で満足できる。それはたぶん、日本人が大むかしから床やたたみの上にすわってくらしてきたこととかかわりがあるのではないだろうか。

たたみにすわっていると他人と顔をつきあわすようでも気にならない。だが、ひとたびすにすわると、あいてとの距離がもっとほしくなるのである。

(語注) \*禁忌(タブー)……してはならないこととして禁じられていること。

問一——線部(1)「相席あひざま」とありますが、これはどういうことですか。本文中の言葉を使って二十五字以内で説明しなさい。

問二——線部(2)「その貧しさ」とありますが、これはどのようなものですか、もっともふさわしいものをアオより選び、記号で答えなさい。

ア グルメといわれるような高級な食事をする際には広いテーブルで食べているが、うどんという日本の庶民的な食べ物を食べる際にはせまくるしい席で食べなければならないこと。

イ 日本人にはたたみや床に座るといふ文化があるのに、日本食を食べるときもテーブルで食べ、それによって日本特有の文化を失いつつあること。  
ウ 相席をさせられると食べ物の味わいが薄くなってしまふことを気にして、日本人は、不親切にも相席をことわるようになり、他人への気づかいをしなくなってしまうこと。

エ どのような社会においても、食事には、こみいった作法やつつしみが求められるのに、いそいでかきこんで食べるというぎょうぎの悪いことをする人がいること。

オ 食事には、いろいろな作法やつつしみが求められており、また、同席することには特別な意味があるにもかかわらず、日本人がそれに無関心になっていること。

問三 (1)・(2)・(3)には、それぞれ二字の言葉が入ります。次の漢字群の字を組み合わせ、それぞれにふさわしい熟語を作りなさい。

漢字群 理・事・心・無・慣・背

集・習・前・後・団・体

問四——線部(3)「ナワバリ」とありますが、これはどのようなものですか。たとえを使って説明しているところを本文中より十字以内で抜き出しなさい。(句読点を含む)

問五——線部(4)「それが食べ物のあじわいをどれほどよくしているかわからない」とありますが、なぜ「うすくしている」のですか。説明しなさい。

問六——線部(4)「日本人はふだん身体接触を好まないにもかかわらず、はるかに小さな『ナワバリ』で満足できる」とありますが、筆者はなぜ「日本人」はそうなったと考えていますか。「……から。」につながるように本文中より三十字以内で抜き出しなさい。(句読点を含む)

四 次の——線部の漢字をひらがなになおしなさい。

- ① 直情径行の性格。
- ② 再来週訪れる。
- ③ 神主がおはらいをする。
- ④ 悪徳業者が横行する。
- ⑤ 生命の尊厳。
- ⑥ 收拾がつかない。
- ⑦ 悲喜こもごも。
- ⑧ 治安が悪い。
- ⑨ 里心がつく。
- ⑩ 血液を採取する。

五 次の——線部のカタカナを漢字になおしなさい。

- ① トウカクを現す。
- ② 注文をツイカする。
- ③ キコウのよい土地。
- ④ テッキンの家が建つ。
- ⑤ 農作物をシュッカする。
- ⑥ フテキな態度をとる。
- ⑦ 多くのギョウセキを残す。
- ⑧ シナサダめをする。
- ⑨ 体をソらす。
- ⑩ スミやかに解決する。

